



2025年度浜 通り研修

8月飯舘組C班

三村 柚葉

小林 拓登

中村 岳大

樋口 涼大

Park Chanbin



研修を通して感じたこと

- えごま栽培で地域コミュニティの復興
- 牧場は原発事故の風評被害でやりにくい印象を持った →やはり知名度がないと厳しい？
- 飯舘牛を食べておいしかった →ブランドとしてもっと知名度を上げられないか
- えごまの時の会話
自分たちで放射線の空間線量の測定をした。

最初は科学者に対し不信感があったが科学者の人と交流を深めるうちに信頼感が生まれ、データを信じるようになった。 →交流することが大切
- 店が少ない →少し不便
花やブルーベリー栽培をやっているところがあった。 →これを生かしてもっと復興できないか？
- 浜通りで暮らす人々の前向きな気持ちを実感した →外から見た福島と中で暮らす人の福島の違い
- 直接現地で体験 →知識だけを話すより説得力があり、周囲の認識を少しでも変えることに繋がる

自ら**経験**して、**感じて**、**考える**ことの**大事**



経験できる機会を増やす

- 県外でのイベントに出店
→ 県外のイベントに出店して知ってもらう
その場で焼く(鉄板・炭火) → 香りとライブ感で集客
加工品販売(冷凍ステーキ肉、レトルトカレー) → 持ち帰り需要に対応
コラボ商品(飯舘牛バーガー、飯舘牛カレー) → 若者向け・SNS映え

- 音楽フェスティバルなどのイベントの開催

OGA NAMAHAKE ROCK FESTIVAL(秋田県・男鹿市)

過疎地である男鹿半島の漁港を舞台にしたロックフェス。

地域文化「なまはげ」と音楽を融合させ、観光・地域振興の成功例。

- **フェスをするメリット**

宿泊・飲食・物販・交通・観光への波及効果が大きい。地方経済の活性化につながる。

総合経済効果は約11億3400万円にものぼる。(間接効果や第二次波及効果を含む)

フェスをきっかけに地名や文化を全国・海外に発信できる。

過疎地域に若い世代や都市部の人を集め、移住・関係人口拡大のきっかけになる。

「なまはげ(秋田)」や「阿波踊り(徳島)」のように、伝統文化との組み合わせで新たな魅力を作れる。

→ 飯舘に置き換えると

「日本で最も美しい村連合」に加盟していた飯舘村の自然を舞台に、野外フェスとして自然体験を融合。

音楽フェスの屋台などで食文化(なみえ焼そば、飯舘牛)と一緒に発信。

昼は音楽ライブ、同時に地元食材のマルシェやワークショップをしてみる。

経験できる機会を増やす



- 災害と復興の体験型ツアー
→国内の学校や企業だけではなく、インバウンド向けのツアーを企画
「日本の災害対応を学ぶ教育ツアー」として販売可能
日本での学びを世界の学びに
- 国内に加え、海外から来る学生・企業研修向けに、以下のことを組み込む
防災訓練体験(避難誘導、非常食調理)
震災遺構の見学 現在進んでいる復興現場の視察
被災経験者や地域住民の声を直接聞く機会
海外の方向けに、大学生などがその機会に参加して外国語を用いて伝える
- チェルノブイリの原発ツアーのような、1Fのツアーを通して廃炉について発信する
原子力安全やエネルギー政策など、世界的に有益な情報を発信可能

↓これによって得られる効果

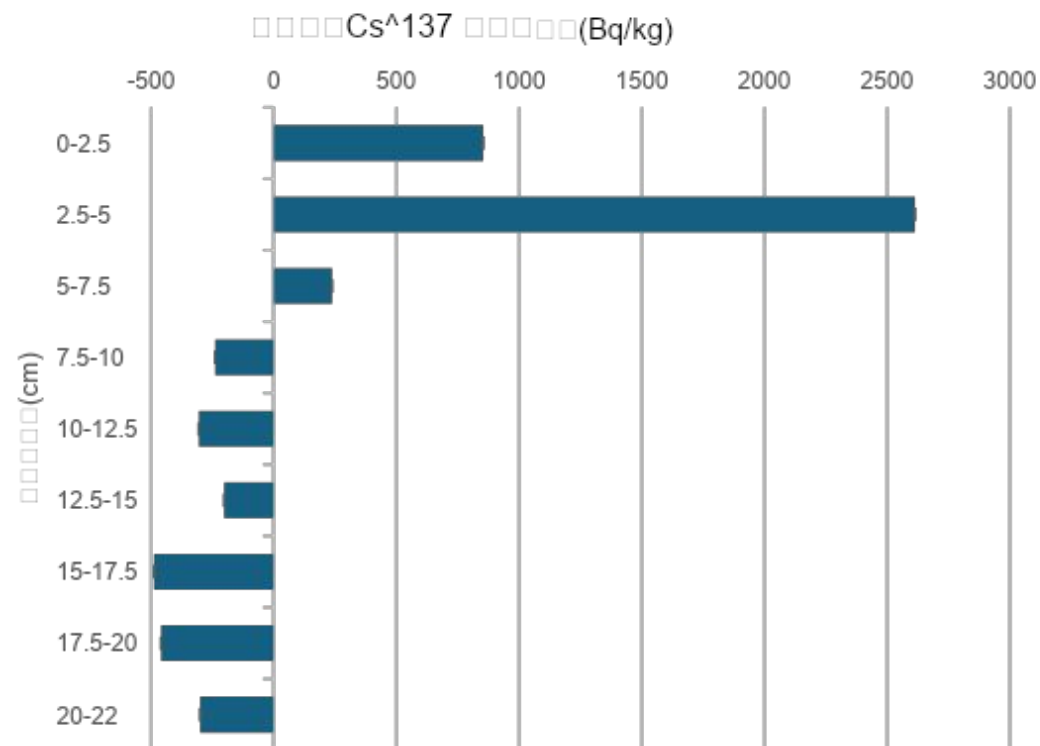
- 日本人
震災の教訓を世界と共有するために、若い人々が経験を正しい事実伝えていくことが重要
- 外国人
母国で活かせる知識を得る。また、福島の実地性、地域の良さを知ってもらえる。

直接浜通りと**触れ**ながら、**理解**を深める

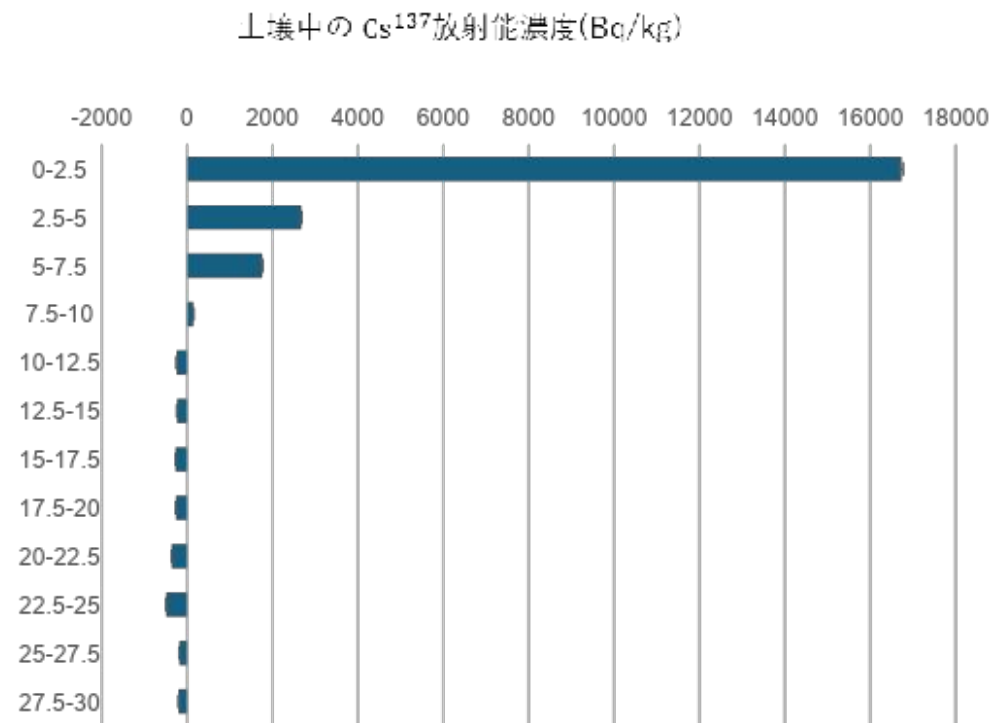


ライナー土壤の結果

川底



川辺





ライナー測定結果

川の流れが土壌の放射能濃度の深さ分布にどのような影響を与えているかを見たかった

→川底と川辺でライナーを採取し比較することに

川底はたいてい水が溜まっていて水が少ないところを探すのが大変だった。

ライナーを採取したとき土壌が柔らかかったため縮んでしまい25cm分の土壌を採れなかった。

川底は0-2.5cmよりも2.5-5cmの放射能濃度の方が高かった。

→川底は水の流れの影響で土壌が混ぜられているのではないかと思った。

また川底と比較して川辺の方が圧倒的に放射能濃度が高かった。

→川底の表層土壌は流されてしまったから

コケとコケの生えていた木とその表層土 壌の Cs^{137} 放射能濃度



(Bq/kg)	土壌	木の幹(水洗いなし)	木の幹(水洗い後)	コケ
①コケ(生きている木)	35775.4±4.6	9164.3±2	4756.6±15.4	10750.9±1.4
②コケ(死んでいる木)	11099±1.4	-	-153.2±1.6	835.8±0.2



コケの測定結果から考察できること

①と②の比較

①コケ(生きている木)

- ・土壌の放射能濃度が高い
→根に囲まれており山の斜面に存在したため、水などに流されにくかったと考えられる。
- ・木の幹よりもコケの方が放射能濃度が高い
→コケは水を保持しやすいため吸着された。コケは代謝が遅いため排出されにくい。
- ・苔の生えている位置が数本の幹の内側 →放射能がたまりやすいと考えられる。

②コケ(死んでいる木)

- ・土壌の放射能濃度が①に比べて低い
→水の流れた後が見られたため、流されたと考えられる。
- ・コケが新しいように見られた。
→倒木後に表面に付着したと考えられる。
震災当時に雨などで空中から降り注いだ放射能は吸着しておらず、
また、倒木は栄養を根から吸い続けていないので低いと考えられる。



コケの測定結果から考察できること

どちらのデータからも、放射能は「土壌→根→木の幹→コケ」と移行していることがわかり、コケにたまっていることがわかる。

また、木の幹はコケを外す洗浄作業に伴い、水を用いたため、放射能濃度が半減していることが分かった。

そのため②のコケが直接付着していた木の幹の放射能濃度は、残りがコケによって吸われたとも考えられる。